

飛鳥「カナヤケ」考

長谷川 透

第1章 はじめに

飛鳥を研究する上で地名考証は欠かせない。古代の飛鳥地域は『日本書紀』の舞台であり、推古紀から持統紀に登場する宮殿や寺院は、難波や近江を除き概ね飛鳥・藤原地域に所在する。地名は古くからその場所の特徴から名付けられ、地形や方角などの自然や位置関係、過去から現在のある段階で人の手が加わった田畠や構造物などの人工的な特徴が由来となることが多い。由来となった地形や特徴が失われても地名は変わらず生き続けるため、その場所の過去の様子を知りたいときに地名は大いに参考になる。地名研究の歴史は古く、地域の歴史を掘り起こす時にはその端緒となって日本の地域史研究の一躍を担ってきた。

『日本書紀』に登場する飛鳥の宮殿や寺院は‘飛鳥’板蓋宮や‘豊浦’寺などのように地名を冠するものが多い。飛鳥・藤原地域の地名と地名が示す範囲が明らかとなれば、遺構はあっても名称不明な宮殿跡や寺院跡が『日本書紀』に登場する宮殿や寺院に同定されることもある。現在、明日香村の地名は『日本書紀』に登場する地名と一致する部分が多いことは言うまでもない。特に明日香村の大字名は飛鳥時代の地名と重複することは明らかであるが、約1300年の年月を経た現在の行政界と古代の地名が示す範囲や領域は当然変化している。近年では飛鳥地域の考古学成果と文献史料による地名の検討によって、古代飛鳥の地名とその範囲が明らかになりつつある（相原2018）。地名には広域を示す大地名と小地域を示す小地名があるが、時期によって地名が示す範囲や領域が変化する。例えば吉備姫王が眠る‘真弓’崗も大地域を指しているのか小地域を指しているのか史料の読み方ひとつで地名と遺跡の解釈が牽強付会されることも起こりうる。地名は当初命名されたものが後に口語や方言などで訛るなどの変化した形で生き続けるものもあれば、後の新しい時代にそのときの情勢によって異なる地名に変えられたものもあるだろう。飛鳥地域に残る地名を遍く飛鳥時代に結びつけられるかは検討の余地がある。地名にはある時期のその場所の呼び方を残しており、その地域の歴史を内包している。地名考証はその土地の通史を概観する上で重要な役割を担っているといっても過言ではない。

飛鳥・藤原地域では小字名に長谷田土壇や大宮土壇、コンドウ、コウドウ、大門など歴史的な遺構を思わせる地名がよく残っている。こうした地名はかつての宮殿や寺院の基壇跡などが地形の高まりとして遺存していたものであるが、後に寺社や宮殿跡の堂塔と推定されたものが地名となって音として言い伝えられた。なかでも、寺院の伽藍を構成していた堂塔がコンドウやコウドウ、コトウのように小字名として遺称が残る場合は、その場所に未知の寺跡があったことを推測させる。しかし、こうしたわかりやすい遺称が全ての宮殿跡や寺院跡に残っているとは限らない。かつて島本一氏は飛鳥の寺址周辺には小字「カナヤケ」が多く分布することに気づき、寺とカナヤケに何らかの関係があるのではないかと指摘した（島本1940）。その後、「カナヤケ」について注目されることはなかったが、「カナヤケ」が中近世のたたら製鉄地に認められる小字名「金屋（カナヤ）」に近似すること、かつ寺院跡周辺に分布することから「カナヤケ」遺称地には寺院に関係する工房があったのではないかという通念が広まっていった。果たして小字「カナヤケ」は寺院付属工房であったのか。今回は飛鳥・藤原地域の小字「カナヤケ」とその周辺の考古学成果を検討して、「カナヤケ」と古代寺院の関係を探ってみたい。

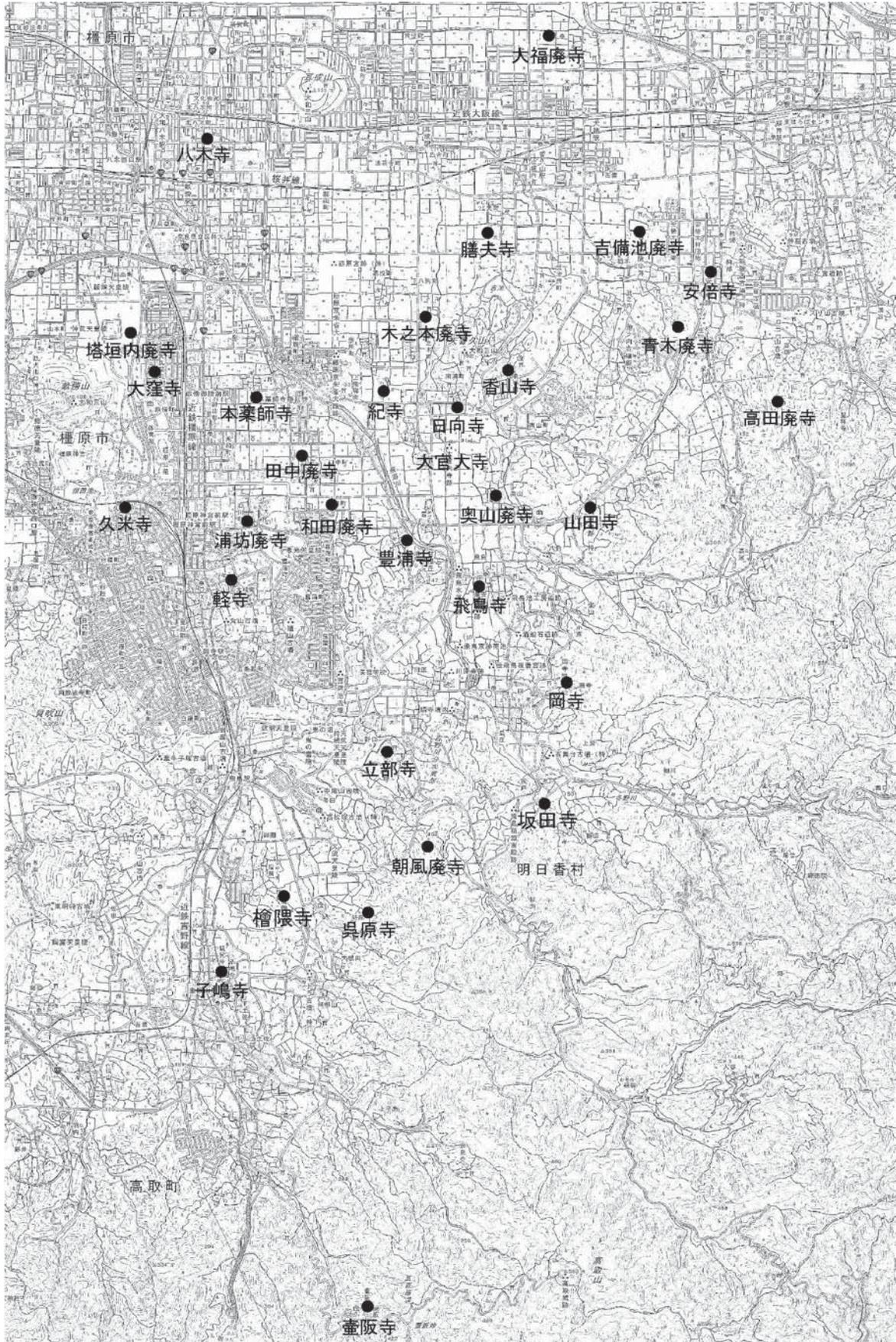


図1 飛鳥・藤原地域の古代寺院分布図

第2章 飛鳥の古代寺院と「カナヤケ」

島本一氏が取り上げた「カナヤケ」にはその他「カナヤ」「金焼」「カマヤケ（カナヤケの転訛か）」がある。分布事例には飛鳥寺、大官大寺、奥山廃寺北方、紀寺、豊浦寺西南、寺院以外では大官大寺西方にある独立丘陵ギヲ山の南西を挙げる（島本 1940）。島本氏が着目した「カナヤケ」という地名は全国的に珍しいわけではないが、飛鳥・藤原地域に「カナヤケ」が多く分布し、そこに古代の寺跡との関係を見出したのは卓見であった。飛鳥・藤原地域には土壇跡や古瓦の散布地が多く分布し、それぞれ古代寺址の推定地と考えられてきたが、そもそも寺跡なのか、寺名は何であるかなど未詳であるものも多い。こうした飛鳥・藤原地域の推定古代寺院が『日本書紀』の京内廿四ヶ寺に該当するとしてこれまで多くの研究がなされてきた。こうした飛鳥・藤原地域の古代寺院研究を基に、島本氏の視点を飛鳥・藤原地域に適用して、飛鳥・藤原地域の古代寺院と「カナヤケ」の位置関係を検討することにした。対象は花谷浩氏が京内廿四ヶ寺として抽出した飛鳥・藤原地域の古代寺院（花谷 2000）とし、小字「カナヤケ」の位置は奈良県立橿原考古学研究所 1980『大和国条里復原図』を参考にした。

寺域が不詳な寺院が多いが、寺院周辺に「カナヤケ」が多く分布し、島本氏の指摘通り古代寺院と「カナヤケ」には強い関連性を窺わせる。一方で、京内廿四ヶ寺候補地では「カナヤケ」がないところも見受けられる。川原寺や山田寺、本薬師寺のように寺勢を誇った寺院でさえ「カナヤケ」を見て取ることはできない。では、何故、古代寺院跡に「カナヤケ」という地名が残

表1 飛鳥・藤原地域における小字「カナヤケ」集成

寺名	小字	位置	寺域	発掘	出土遺物	関係地名／備考
飛鳥寺	カナヤケ	北東	内	—		「大門」
	カナヤ	南	外	○	鞆羽口	「金屋」「弥勒田」
大官大寺	東金焼	東	内	—		「講堂」「大安寺」「阿弥陀堂」
奥山廃寺	カナヤケ	北	外?	—		「カハラタ」「カジャタ」
紀寺	北金焼	東	内	○	鑄銅関連遺物、金箔、木簡、炭、銅屑、漆容器	「キデラ」 紀寺跡第5次・9次調査
	カナヤケ	北	内	—		
平吉遺跡	カマヤケ	南	—	—		豊浦寺との関係?
大窪寺	カナヤケ	—	—	—		「東金度」「西金度」 北 150 mで藤原京期の冶金関連遺物出土
八木廃寺		西	—	—		「八木寺」「寺西」「金池」
醍醐廃寺		—	—	—		「上金池」「長谷田」
膳夫寺	カナヤケ	南東	—	—		「カワラカマ」「古塔」
坂田寺	カナヤケ			—		「古宮」「ドノウラ」「堂ノ上」
	金焼			—		「堂前」
(ギヲ山)	カナヤケ	南西	—	—		
(日高山)	カナヤケ	—	—	○	鞆羽口、鑄型、銅滓、焼土、炭、木簡	「堂坂」

存するのか。そこで小字「カナヤケ」で行われた発掘調査に注目してみると、紀寺では冶金関連遺物、日高山では瓦窯が検出されている。寺院に関連した生産遺跡の存在を考慮できるのではなかろうか。しかし、その他の「カナヤケ」では発掘調査が行われておらず、事例としては不足している。生産遺跡が地下にある場所を「カナヤケ」と呼んでいたのかどうかは現状では証拠不十分であると言わざるを得ない。

第3章 金属器生産と「カナヤケ」

次に飛鳥・藤原地域の発掘調査で確認された冶金関連遺構・遺物を分布図にし、小字「カナヤケ」と対比することにした。かつて金属生産や窯業などの生産活動が顕著であった地点において「カナヤケ」以外にも何らかの生産活動を示す小字名が残っているのかも探してみたい。生産関連遺構・遺物については飛鳥資料館が作成した集成表（飛鳥資料館 2011）を参考に、地名は『大和国復原条里』にある地図に分布図を作成した。

鑄造や鍛冶、瓦窯などの手工業生産に関わりのある地名には「ユヤノタニ」「ユヤミジリ」「イヤノモト」「カジヤタ」「カワラタ」などがある。ユヤ（湯屋）の由来は鑄造用語である溶融した金属‘湯’と鑄鉄製の風呂の湯釜を置く湯屋、イヤは鑄物を扱う屋号である鑄屋が思い当たる。「カジヤタ」は鉄の鍛冶屋から由来するものかと思われる。「カナヤケ」も前述のように金属を扱う屋号や火を使った仕事、鉄の鑄であるカナケを連想させる。こうした生産活動を示す小字名と冶金関連遺構・遺物との位置関係を調べてみると、紀寺跡や大官大寺跡を除き、思いのほか一致するところは少ない。生産関連遺物出土地の近くに関連地名があるといっても、直接結びつけるわけにはいかない。冶金関連遺物はその出土量や残滓状態によって、金属生産における採取、精製、加工のどの段階の行程が行われていたか、その工程がどれくらいの規模で操業されていたかがわかる。いわゆる包含層出土のものや単発で行われた操業では近くに持続的な工房が存在していたとは考えられない。一連の操業に必要な道具（金床石や砥石、鞆羽口、坩堝）、操業行程から出た金属の残滓遺物、操業された炭層が広範囲に確認できることによって、そこで連綿と操業された工房もしくは作業場を想定することができる。飛鳥・藤原地域の中で冶金関連遺物がまとまって出土した遺跡には①飛鳥池遺跡、平吉遺跡、②水落遺跡、石神遺跡、③川原寺北方遺跡、西橋遺跡、檜隈寺北方などがある。①は長期わたり多種生産を行い、受注、生産、流通を広域に行った総合工房、②は短期単種生産を行い、臨時の目的に応じて受注と生産を行う専門的工房、③は寺院の運営・整備に対応する工房（修理所）に分類できる。①・②では平吉遺跡を除き「カナヤケ」のほか生産活動を示す小字名は見当たらない。平吉遺跡出土の冶金関連遺物の科学分析では、鑄銅のほか、鉄・金などの複数の金属素材を扱った工房であったことがわかってきた（飛鳥資料館 2010）が、その立地から藤原京造営に関連する工房なのか豊浦寺寺院工房なのか判然としない。平吉遺跡の位置付けを保留するにしても、飛鳥・藤原地域における生産工房の多くは③寺院工房に該当する。かつて工房が営まれた場所とその周辺は炭層や焼土、金属生産の残滓が多く、いわゆる産業廃棄物が埋没した状態であるため、後世の人たちはその地の土壤環境がよくないことを知っていてもおかしくない。そうした場所はあえて禁足地にしたり、その場所の草を動物の飼料にしないなどの言い伝えが残ることがある。このように、かつてその地の生産活動が地表面に残っていた場合は、その地の小字に生産を示す地名が付与されてもおかしくない。冶金生産の産業廃棄物で後に土壤に与える影響を考えると、古代の生産活動が何らかの共通した表現で地名に残る可能性は高いと考えられる。

しかし、①のように大規模操業の工房でさえ「カナヤケ」の地名は残っていない。①～③をみても古代の工房跡地と生産を示す小字名は一致するとは限らず、古代の土地利用状況が地名の由来になっていない。ただし、①の飛鳥池遺跡の南西、正確には飛鳥京内に「金屋」や「弥勒田」などがあり、冶金工房や仏教施設を思わせる地名が残っている。地名がその地の履歴を示しているのであれば、飛鳥京内においてこのような地名が遺存しているのは示唆的である。

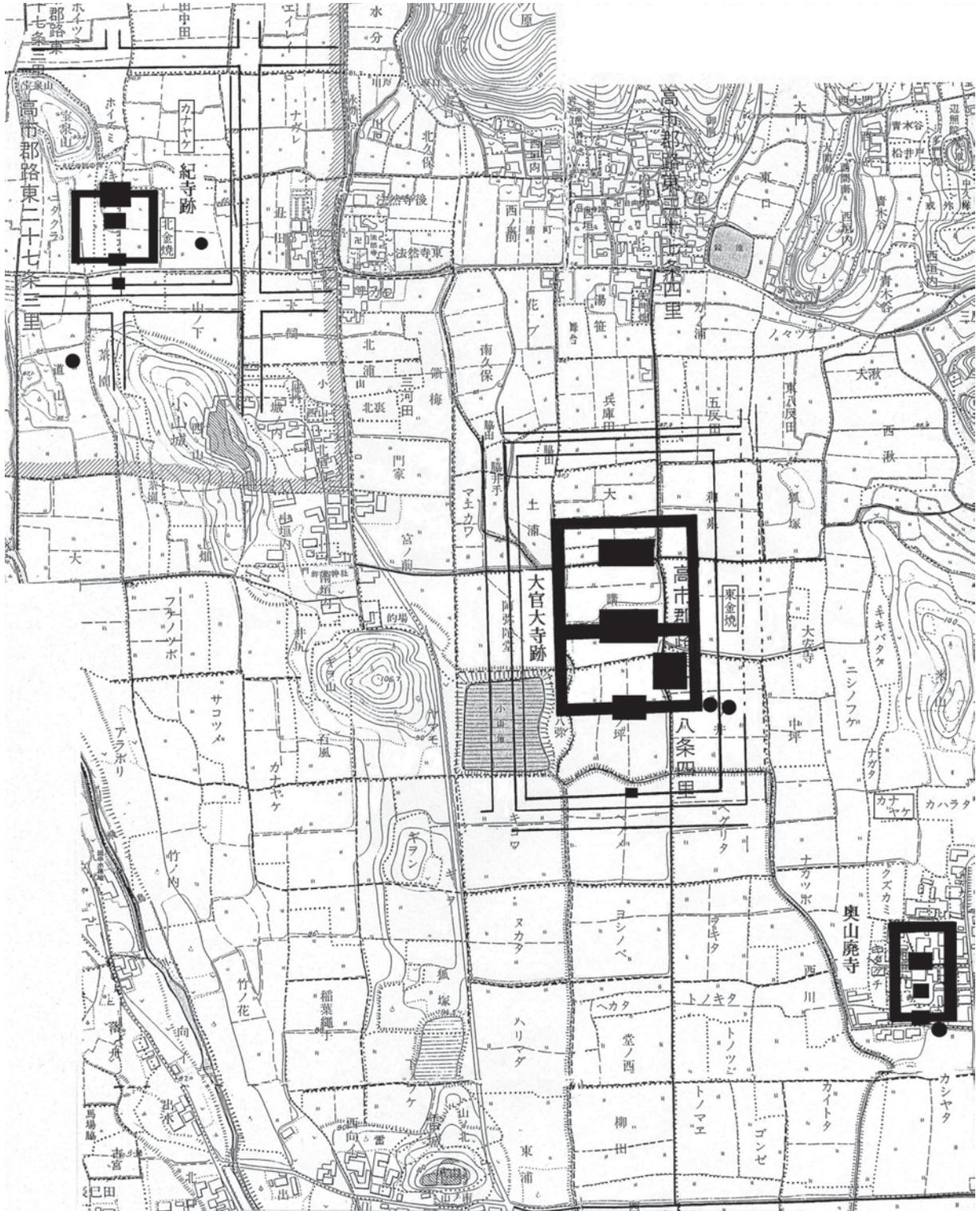


図2 冶金関連遺物出土分布図（紀寺・大官大寺・奥山麿寺）

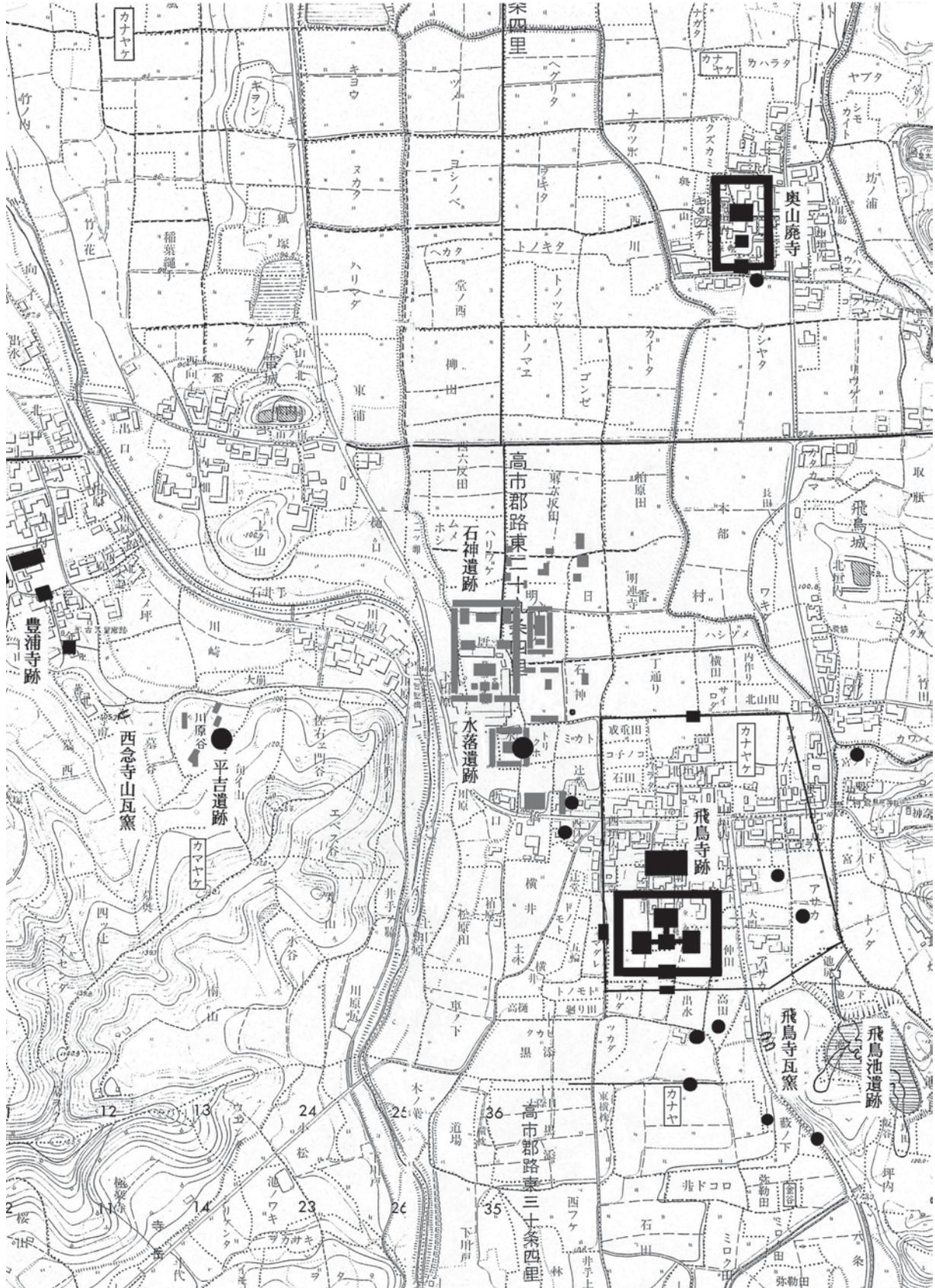


図3 冶金関連遺物出土分布図（豊浦寺・飛鳥寺）

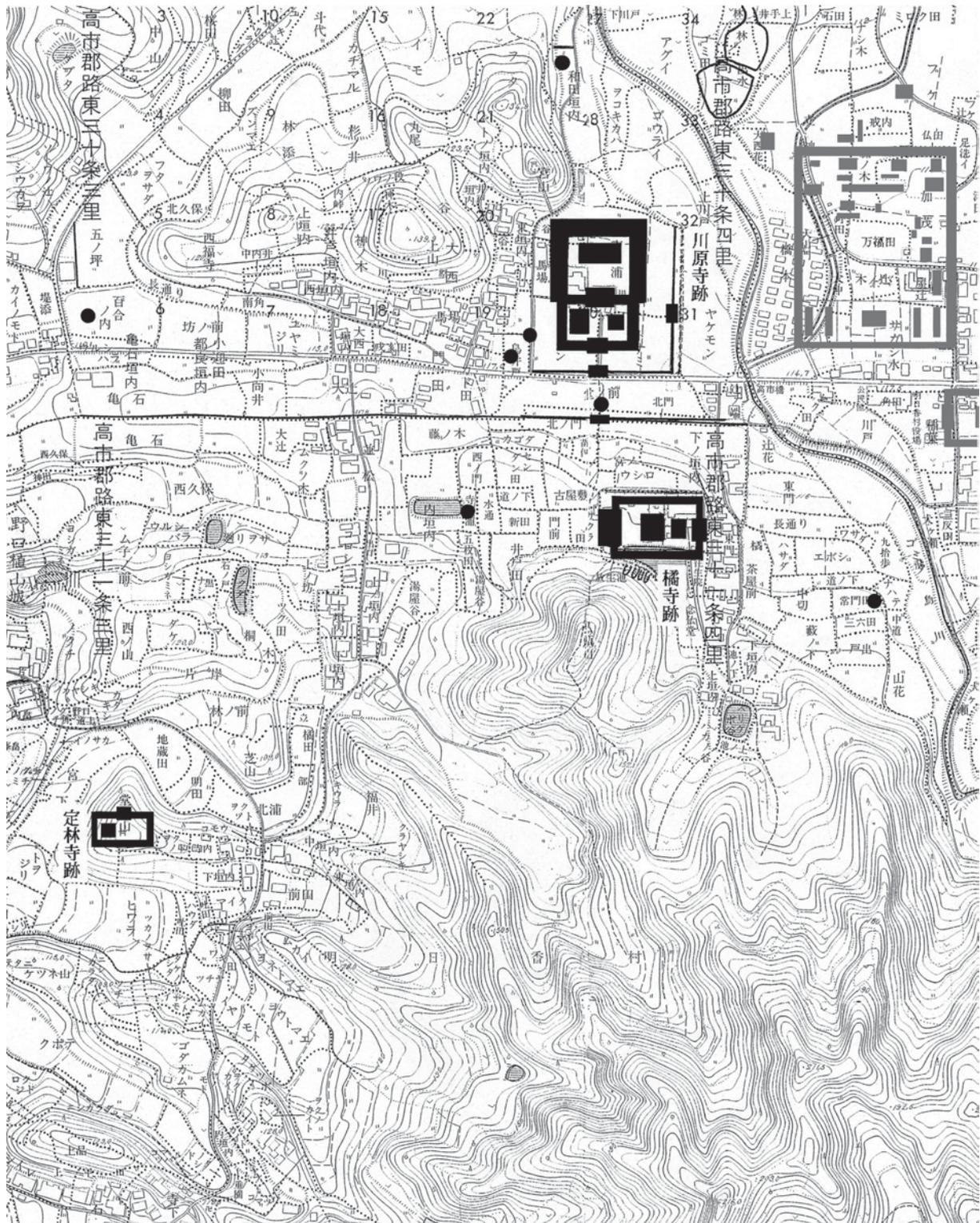


図4 冶金関連遺物出土分布図（川原寺・橘寺・定林寺）

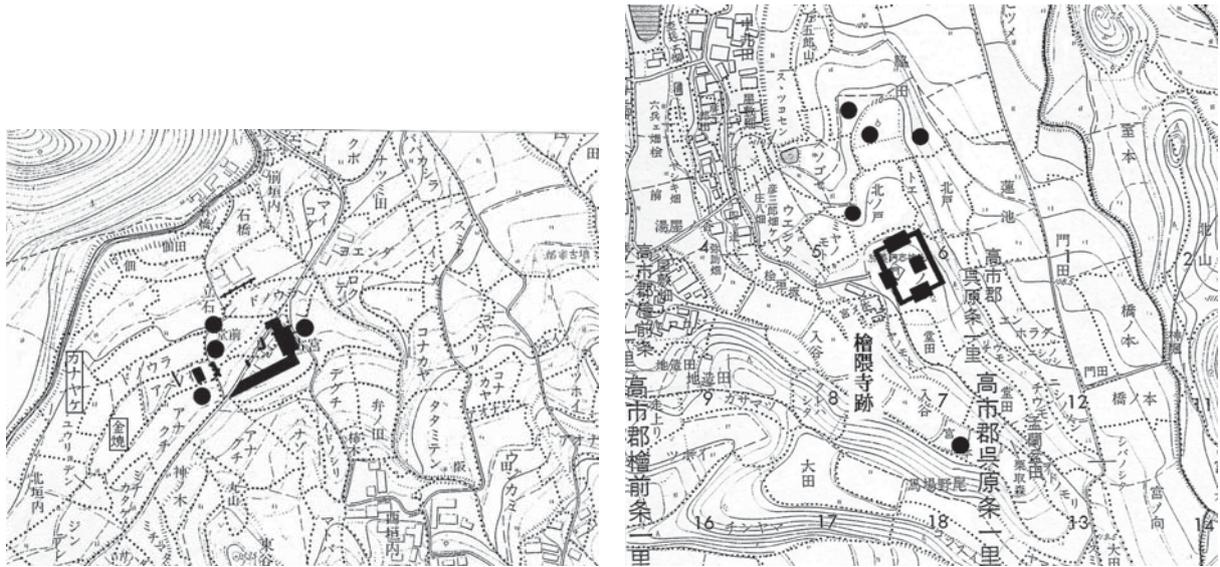


図5 冶金関連遺物出土分布図（左：坂田寺 右：檜隈寺）

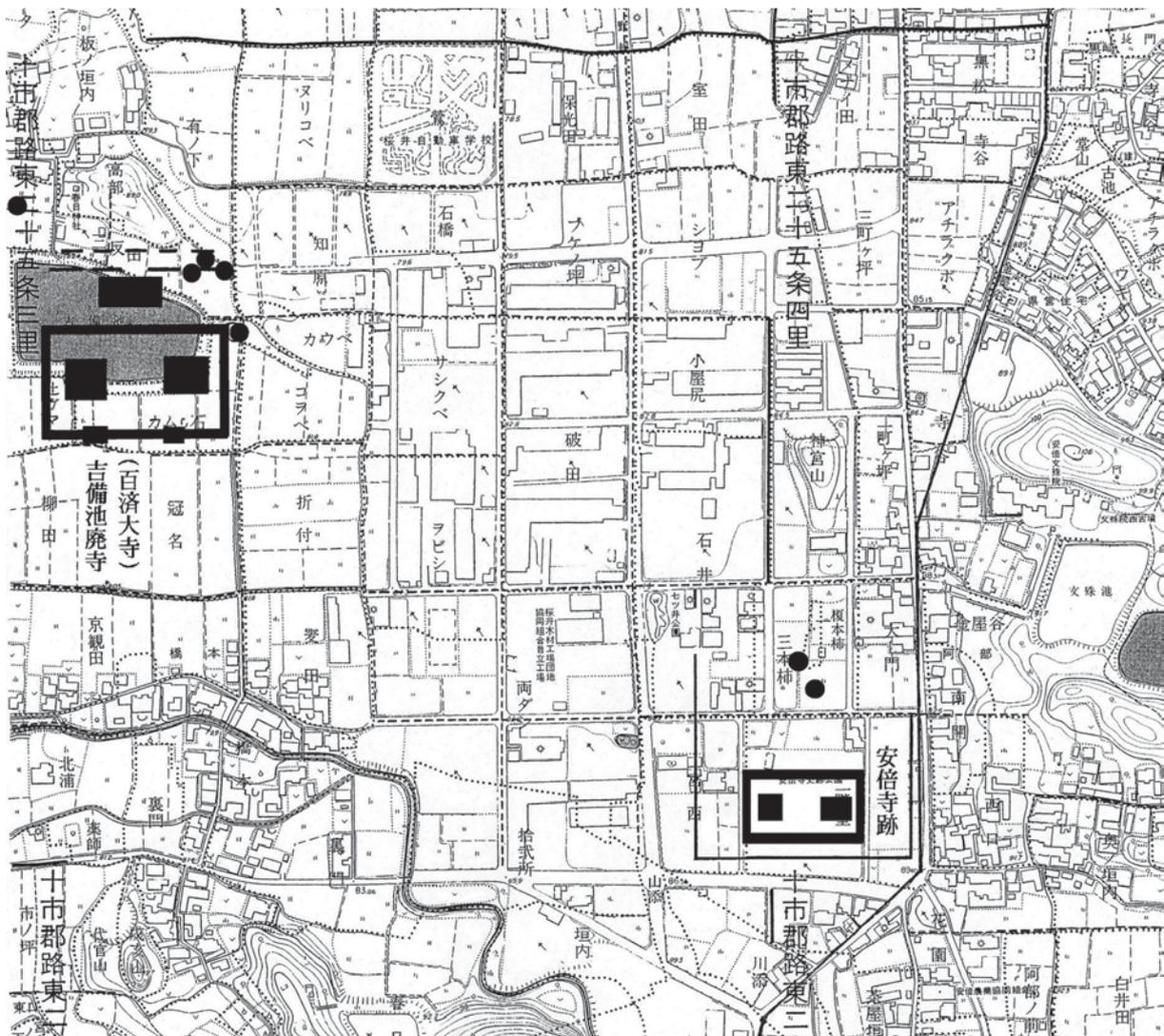


図6 冶金関連遺物出土分布図（吉備池廃寺・安倍寺）

第4章 古代飛鳥の寺院工房

寺院には中心伽藍を構成する堂塔のほかに寺院を維持・管理する機関や付属施設がある。仏法僧の場である金堂、講堂、塔、回廊、僧房、食堂、経楼で構成された中心伽藍は「伽藍地」と呼び、「伽藍地」と付属施設を含めた区画を「寺院地」、「寺院地」周辺に広がる寺所有の田畠、山川沼沢は「周辺（寺辺）寺領」と分類した（大脇 1997）。寺院地は寺の日常生活を運営するための場で、院ともよばれ大衆院、政所院、倉垣院、花苑院、菌院、賤院、厩、修理院、温室院、大炊院などがある。奈良時代以降の寺院では、絵図や資材帳などの検討によって寺院地が計画的に配置されていることが知られている。こうした付属施設の内、修理院では仏具や調度具など金属器の生産・加工・修理、建造物の修繕、瓦の葺き替えを行い、寺を維持管理する上で欠かせない施設であった。こうした修理院のような冶金関連工房は古代寺院の寺域北部に配置される例が多いことが指摘されている（杉山 1983）。古代寺院の中心伽藍は、南に大門があり北に向かって順に中門、塔、金堂、講堂が回廊で囲まれるため、雑舎とよばれる寺院地の付属施設は当然中心伽藍の周囲（外側）に配置される。平成 14 年には川原寺寺域北限付近で冶金関連工房と瓦窯がみつき（奈文研 2004）、杉山氏の指摘通り飛鳥の古代寺院でも裏付けられた。近年では檜隈寺北方でも寺院造営から整備に至る段階の冶金工房も確認され（明日香村 2013）、さらに檜隈寺では講堂の北西部では尾根斜面に平安時代の瓦窯も確認された（奈文研 2015）。檜隈寺は寺域の範囲や伽藍の正面観が確定していないものの、寺域北部において操業時期を異にする寺院付属工房が配置されていたことがわかる。このような視点でみると、橘寺の西側にある西橘遺跡では寺院と同時期の冶金工房がみつかり（榎考研 1985）、東を正面とする橘寺にとって背面側に寺院工房が配置されていたとみることができる。このように、飛鳥の古代寺院では寺院の造営から整備段階に操業した工房が寺域の北側（背面）に多いといえる（註1）。修理院と呼ぶべき寺院工房は、中心伽藍が整い寺域が確定した後に計画的に北側（背面）に配置されたと考えられる。地名との比較でみると、前述した寺院工房跡地にいずれも「カナヤケ」など冶金を思わせる地名は残っていない。未発掘だが奥山廃寺北側にある「カマヤケ」「カハラタ」、飛鳥寺跡北東にある「カマヤケ」などは修理院のような寺院工房があったのかどうか気になるところである。この小字の発掘調査が望まれる。

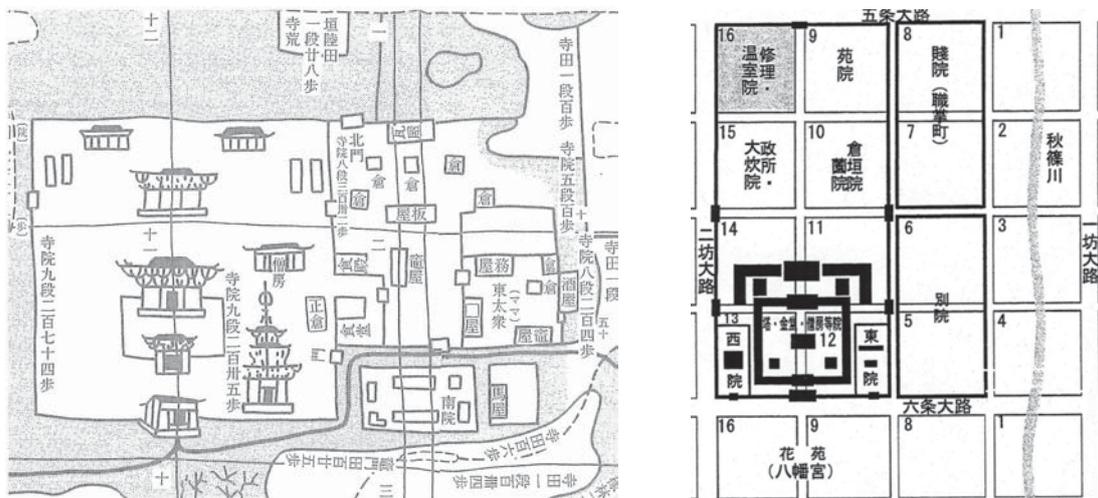


図7 古代寺院諸院配置図（左：額田寺 右：薬師寺推定）

〔左図：山口 2001 右図：松村 2005 より引用〕

その一方で、杉山氏は寺域東部などでも寺院工房が検出される例が多いとも指摘している（杉山 1983）。飛鳥における寺域東部の例として、大官大寺跡の東面回廊近くで鞆羽口と鉄滓が出土し（奈文研 1977）、鍛造を行った造営時の仮設工房ではないか（杉山 1983）とした。

紀寺跡では伽藍の東側にある小字「北金焼」で金箔や鋳銅関連遺物、漆工関係遺物がまとまって出土した。（奈文研 1988）操業時期は 7 世紀末から 8 世紀初頭に位置づけられ、寺院造営時の工房として伽藍の東側の空閑地に配置されたと考えられる。

飛鳥寺では寺域内にある「アサカ」周辺の発掘調査では焼土・砥石、鉄釘、鋳滓が出土し、整地層に焼土・炭・瓦を含み、整地層下部には約 30cm の炭単一層が堆積していた（奈文研 1985・1993）。この整地層の上では礎石建ち建物が確認され、この建物は僧道昭の東南禅院ではないかと考えられている（奈文研 1993）。整地層は出土遺物から 7 世紀前半以降とされ、これ以前に周辺では操業内容は不明だが大規模な操業が行われていたことを窺わせる。この「アサカ」周辺は飛鳥寺中心伽藍からみて東に位置しているが、この周辺のみ寺域が不整な形状を呈しており、変則的な寺域が形成されるような特別な事情があったことを窺わせる。この「アサカ」周辺の炭層の存在を手がかりに『元興寺伽藍縁起並びに流記資材帳』の検討を行った赤川一博氏は、この地を飛鳥大仏の製作地と推定した（赤川 2003）。『日本書紀』によれば、飛鳥寺の伽藍が完成して後、推古 13（605）年に本尊（飛鳥大仏）の造像がはじまったとあり、飛鳥大仏の完成は諸説あるが推古 17（609）年であったとされる。「アサカ」周辺の整地層が 7 世紀前半以降であることから、整地層下部にある炭層は時期的に大仏製作時に近い。しかし、「アサカ」周辺では金銅の丈六仏を鋳造するうえで必要な鋳造炉や鋳型、銅滓などは確認されていない。古代において丈六仏を鋳造する場合、完成された丈六仏はとても重く、あとから堂内に運び入れるのは困難であったことは想像に難くない。大仏製作地は本堂近くにあるほうが合理的である。よって、数トンもある金銅製丈六仏を運び入れる距離を極力おさえるため、本堂に近接した空閑地で鋳造した後堂内に運び入れるか、または大仏鋳造地の上に本堂を建てて大仏をそのまま安置させるかが良い^{〔註2〕}。小字「アサカ」は東金堂にも近く大仏製作地に好ましい立地にあるといえよう^{〔註3〕}。このほか飛鳥大仏製作候補地として、飛鳥寺の南方、寺域外の小字「藪の下」や小字「カナヤ」「金谷」が挙げられる。ここでも冶金関連遺物が出土するが、ここを大仏製作地とするには本堂から距離的に遠く困難と言わざるを得ない。近くには小字「弥勒田」もあり飛鳥大仏との関係を疑いたくもなるが根拠付けるものはない。飛鳥寺が伽藍完成後も寺院荘厳や宗教活動に必要な造寺・造仏を行っていたであろうが、いまだ飛鳥寺創建から造営時の工房はみつかっていない。飛鳥寺瓦窯の所在地から見ても飛鳥寺創建から造営期の工房は小字「アサカ」付近または飛鳥池遺跡周辺であったと考えられる。

ほかにも、飛鳥の古代寺院の南側において冶金関連遺物は出土している。奥山廃寺では塔から南に約 40 m にある「カジヤタ」付近で、寺院整地土を掘り込む土坑内から鋳型や坩堝、銅塊、銅滓がまとまって出土した（奈文研 1996）。土坑内には被熱で変色した痕跡があるため周辺での操業が推定されるが、狭小な調査区であるため近くに工房のような継続的な操業が行われたとは考えにくい。出土地は伽藍の南面回廊か中門の推定地とされるが、寺院造営に伴う整地の後に一時的に銅を扱った操業が行われていたと考えられる。川原寺では西金堂から約 50m の位置にある小字「ロウモン」付近で、緑灰色砂質土層上面にある土坑から鋳銅関連遺物、そして土坑の下層にある落ち込みからも多量の炭と鞆羽口、坩堝片、銅滓が出土した（奈文研 1997）。そのほか風鐸と見られる銅製品や銅滴も認められることから、近くで鋳銅操業が行わ

れていたとみられる。操業の時期は、緑灰色砂質土層とその直下の地山上面から飛鳥Ⅳ～Ⅴの土師器と須恵器が出土することから、川原寺創建期以降と考えられる。川原寺の寺域西限は確定していないが、この調査地は寺院造成の整地土の範囲に収まる。寺域北限工房のように長期にわたって操業した工房とは異なり、寺院の創建・造営時に関わって稼働した鑄銅工房ないし作業場であったと考えられる。この奥山廃寺や川原寺はいずれも同位置で継続的な操業は見られないことから、創建・造営時だけ操業した工房ないし作業場であったと考えられる。

一方、飛鳥寺南方の小字「藪ノ下」の西で行われた発掘調査では、礫敷整地土の下層にある自然流路埋土から7世紀前半から中頃の土器と共伴して銅鋳滓が出土した(奈文研1985)。出土位置は飛鳥寺よりも飛鳥池遺跡に近く、飛鳥池工房に伴う遺物と考えることもできる。しかし、飛鳥池工房の操業開始が7世紀中頃以降であることから、この調査区の冶金関連遺物を飛

表2 飛鳥・藤原地域の古代寺院における冶金関連遺構・遺物出土地名表

寺院名	小字名	出土位置	出土遺構	冶金遺物	年代	備考
飛鳥寺	「藪ノ下」 付近	寺域外 寺の南	自然流路	木片・銅鋳滓・瓦片	7世紀前半～ 中頃	
	「アサカ」 付近	寺域内 寺の東	炭層・整地層	炭・焼土・漆附着土 器・鞆羽口・砥石・ 鉄製品・鋳滓・瓦	7世紀前半頃	推定東 南禅院
奥山 廃寺	「カジヤタ」 付近	寺域内? 寺の南	土坑 SK360	焼土・銅滓・鑄型片・ 炭	寺院整地土 上面	
川原寺	「ロウモン」 付近	寺域内 寺の西	土坑 SK495・ 492・落ち込み	銅滓・銅塊・銅滴・ 鞆羽口・坩堝片・炭	飛鳥Ⅳ・ Ⅴ以降	
川原寺 北限	「和田垣内」 付近	寺域内 寺の北	炉跡群・鉄釜鑄 造土坑・区画溝	鞆羽口・砥石・坩堝・ 鑄型・鋳滓・ガラス 関連遺物・鉄製品・ 銅製品・炭	7世紀後半 以降	
西橘 遺跡	「寺ノ浦」 付近	寺域内? 寺の西	鍛冶炉6基・ 土坑3基	鉄滓・鞆羽口・漆壺・ 榛原石	飛鳥時代中頃 以降	寺院 工房?
紀寺	「北金焼」 付近	寺域内 寺の東	土坑16基(炉 跡?)、方形土 坑	鑄銅(銅滓・銅塊・ 炉床・鞆羽口・坩堝・ 湯口・バリ)、焼土・ 漆容器、漆篋、刀子 金箔、木簡	7世紀末～ 8世紀初め	
	「道山」	寺域外 寺の南西	土坑	鞆羽口	7世紀末～ 8世紀初め	
大官 大寺	「トノ井」 付近	寺域内 寺の東	溝、土坑	焼土・炭・瓦・鉄滓・ 木片・木簡	藤原京期	木簡 「讃用郡 □里鐵 十連」
檜隈寺	「脇田」 付近	寺域外? 寺の北	土坑・方形焼成 土坑	鉄滓・鞆羽口・坩堝・ 石材	7世紀中頃～ 8世紀前半	

鳥池工房に伴う遺物とみるか、飛鳥寺や飛鳥宮に関連した操業が行われていたかのどちらかと考えることができる。

このように伽藍の南側で確認される寺院工房は、寺院創建から造営時に稼働していた工房とみられ、伽藍完成後には寺院の維持管理を担う修理院に引き継がれたとは考えにくい。以上をまとめてみると、古代寺院の創建から造営時は寺院工房または作業場を需要のある堂塔の近くに設けて操業を行い、伽藍地や寺院地が整備され寺院の維持管理体制が構築された後は、本尊が安置された主要堂塔の背面側に配置されるのではないかと考えられる。そして寺院の冶金工房が鋳銅を扱う操業が多く、当然寺院で必要な仏像や仏具、調度具などの要望に応えた操業が考えられる。以上、杉山氏の指摘を追認する結果となったが、近年の調査事例をふまえて飛鳥の古代寺院工房を概観した。

第5章 まとめと今後の課題

今回は小字「カナヤケ」からみた飛鳥の古代寺院と冶金工房について思うところを述べた。結論、飛鳥では小字「カナヤケ」は古代寺院や瓦窯との関連が強いと言え、寺院に付属する冶金工房との関わりは今後の発掘調査に期する。寺院工房の発掘調査では、工房の操業が寺域内でも中心伽藍付近なのか寺域周辺なのか、工房の近くに大衆院や政所院などが確認できるか、操業内容が鉄鍛冶なのか鋳銅なのか、を明らかにすることが重要である。冶金関連遺物の年代とその出土の詳細な検討が望まれる。そして飛鳥地域の古代寺院は伽藍中心部の調査・研究が進んでいるが、寺院地などの寺院周辺部はよくわかっていない。寺院の周辺景観を明らかにすることによって、誰が寺院をどのように造営、維持管理したのかを明らかにすることができる。寺院周辺部の発掘と資料の蓄積が望まれる。

大字名は地域名として古代の地域名が踏襲されることがあるが、より小地域の小字では土地の改変を受けやすく地名が変化しやすいのではないかとと思われる。古代の呼び方がそのまま残るのではなく、後の時代に土壇などの地形の高まりや旧地表面で確認できた痕跡や遺物などによって小字などは付与されたと推測され、飛鳥時代の呼び名がそのまま残っているとは考えにくい。しかし、寺院跡に「カナヤケ」など共通する小字が付けられ、「北金焼」「東金焼」のように互いの位置関係を示しながら付与されていることからすると、「カナヤケ」という言葉に共通理解のようなものがあつたと思えてならない。小字のある場所を発掘調査し、歴史資料を駆使してその場所を歴史的に概観した後にその地名の由来がわかってくるだろう。地道にひとつひとつその場所、その地点の歴史を丹念に拾い集めることで点と点が結びつき、飛鳥の歴史の全体像がみえてくるものとする。今回は飛鳥・藤原地域の小字名と飛鳥時代の遺構に強い結びつきがあるものとして牽強付会な意見を論じた。ご叱正を仰ぎたい。

註

- 1) 冶金のように火を使い煙を立てて金属残滓を排出する操業を仏前（南向きの本尊正面）で行うことは忌避されたとも考えられる。
- 2) : 公益財団法人美術院国宝修理所 所長 八坂寿史氏のご教示による。
- 3) : 「アサカ」に類する地名に「アサカゼ」「アサカジ（浅鍛冶）」がある。「アサカゼ」は稲淵から檜隈に抜ける峠道沿いにある地名で、かつて朝風千軒と称されほど人々で賑わい、古代には竹野王石塔に記された旦風（朝風）の地と考えられている。そのアサカゼ近くには「アサカジ」があり、奈良時代の山岳寺院であった朝風庵寺の候補地と考えられている。「アサカ」と「アサカゼ」を強く関連づけるものはない。「アサカ」の由来は別にあるのかもしれない。

【参考・引用文献】

- 相原嘉之 2018 「古代飛鳥地名考 王都飛鳥における地域名称の復原試論」『泉森皎先生喜寿記念論集』
- 赤川一博 2003 「飛鳥大仏の制作地に関する考察—ランドマークとしての『物見岡』—」『古代文化』第55巻 第9号 財団法人 古代学協会
- 飛鳥資料館 2010 『東アジア金属工芸史の研究 12 平古遺跡出土鑄造関連遺物の調査 奈良市出土鏡の調査』
- 飛鳥資料館 2011 『東アジア金属工芸史の研究 13 飛鳥の冶金関連遺跡』
- 明日香村教育委員会 2013 『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書』
- 大脇潔 1997 「古代寺院と寺辺の景観を復原する—その研究史と問題の所在—」『第1回 摂河泉古代寺院フォーラム 摂河泉の古代寺院とその周辺』泉南市教育委員会・摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫
- 島本一 1940 「飛鳥の寺址とカナヤケ」『大和志』第七巻 第十二號
- 杉山洋 1983 「寺院付属の金属関係工房」『佛教藝術』148号 毎日新聞社
- 杉山洋 2005 「古代の金属器生産と寺院工房」『鑄造遺跡研究資料 2005 日本古代の鑄物生産』鑄造遺跡研究会
- 杉山洋 2006 「古代都城の金属器生産と寺院工房」『鑄造遺跡研究資料 2006 小論集 日本古代の鑄物生産』鑄造遺跡研究会
- 千塚資料館 1997 「大藤原京右京七条六坊の調査」『かしはらの歴史をさぐる6』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1980 『大和国条里復原図』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1985 「7. 飛鳥京跡第101次調査概要（西橘遺跡）」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1984年度』
- 奈良国立文化財研究所 1976 「藤原宮第17次の調査（藤原京七条一坊）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』
- 奈良国立文化財研究所 1977 「大宮大寺第3次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報7』
- 奈良国立文化財研究所 1985 「2 飛鳥寺とその周辺地域の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』
- 奈良国立文化財研究所 1988 「紀寺跡寺域東南部の調査（1987-1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報18』
- 奈良国立文化財研究所 1993 「飛鳥寺の調査（1992-1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』
- 奈良国立文化財研究所 1996 「奥山久米寺の調査（1995-1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』
- 奈良国立文化財研究所 1997 「川原寺の調査—1995-1・1996-1次・1996-2次」『奈良国立文化財研究所年報1997-II』
- 奈良文化財研究所 2004 『川原寺寺域北限の調査 飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 奈良文化財研究所 2015 「檜隈寺瓦窯の調査—第181-4次」『奈文研紀要2015』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 花谷浩 2000 「京内廿四寺について」『研究論集XI』奈良国立文化財研究所学報第60冊
- 松村恵司 2005 「川原寺寺域北端の金属工房」『鑄造遺跡研究資料 2005 日本古代の鑄物生産』鑄造遺跡研究会
- 松村恵司 2006 「飛鳥池工房と川原寺寺院工房」『鑄造遺跡研究資料 2006 小論集 日本古代の鑄物生産』鑄造遺跡研究会
- 山口英男 2001 「額田寺伽藍並条里図の作成過程について 寺領認定と額田寺図」『国立歴史民俗博物館研究報告 第88集』国立歴史民俗博物館